

台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に

関する一考察 (二) — 「天后聖母」について —

はじめに

安部 力

本稿は、前稿に引き続いて現代の台湾（中華民国）の人々、特にカトリック・キリスト教信者の持つ「宗教意識」を探ることを目的とする。

前稿では、中国の明朝末期（16世紀）に始まる、カトリック・キリスト教のイエズス会宣教師の活動により巻き起こった所謂「典札問題」を取り上げ、中でも「葬儀」に関わる問題が、依然として現代の台湾のキリスト教信者にとって大きな問題として横たわっていることを確認した(1)。

本稿では、前稿のテーマに関する現地調査を通して得られた様々な知見を基に、現代の台湾におけるカトリック・キリスト教信者や台湾の人々の宗教意識を探る手がかりについて考えることとする(2)。

一、「天后聖母」について

まず、左の写真をご覧いただきたい。これは台湾の嘉義市内にある宗教施設で撮影した写真である(3)。



台湾嘉義市内にある碑。「天后聖母」とあるのが見える。

「天后聖母」と刻まれており、文字上から判断すれば、「天の后、聖なる母」という意味になるが、この文字から何を連想されるであろうか(4)。

一般に、台湾で「天后聖母」と言えば、恐らく殆どの人々が「媽祖」(5)を連想するであろう。例えば、媽祖を祀る建築物(廟)を「天后宮(媽祖廟)」(6)と言

い、現代の台湾で最も尊崇を集めている「神」として、「聖母」という称号を与えられている対象が媽祖である以上、そう考えることに異論はないのではないだろうか。(左の写真は「媽祖」を祀る「天后宮」)



上の写真は、台湾嘉義縣大林鎮にある媽祖廟(天后宮)。建物の前方にある像が媽祖像。(建物内にも本尊である木造の媽祖像が祀られていたが、撮影は不許可であった。)

つまり、台湾では、この「天后聖母」という称号は、媽祖を指す言葉として用いられるのが通例である。上に示した写真も、台湾で撮影した写真であり、その土地柄を考えれば、「媽祖」を示していると考えることは妥当であろう。

二、「聖母マリア」について

これに対して、台湾における聖母マリアを表わす称号は、現在いくつか確認できるが、代表的なものとしては、「聖母瑪利亞」「天主聖母瑪利亞」「耶穌之母」「天主之母」「中華聖母」「天上母親」などが挙げられる(7)。中でも、最も一般的なものは次頁の写真にあるような「天主聖母瑪利亞」という称号である。

この「中華聖母」という称号そのものから「キリスト教の聖母マリア」を連想できる人が現在の台湾でどれ位の割合で存在するかは、興味のあるところであ



台湾嘉義市中華聖母會敷地内にある聖母子像。

これらは、一見して「キリスト教の聖母マリア」の像と分かる。また、台座の文字も誤解がない。しかし、台湾のマリア像にはまた別の称号が付されている場合もある。これは台湾独特のものであるが、今回の現地調査を通して目に付いた称号は、左の写真にあるような「中華聖母」である。



台北市林森北路長安天主堂にあるマリア像。同じ称号がある。



台湾雲林県斗南鎮聖三堂にあるマリア像。ここの台座にも「天主聖母瑪利亞」とある。



台湾嘉義県大林鎮聖母無原罪堂にあるマリア像。台座には「天主聖母瑪利亞」と書かれている。

ここでは「媽祖」を「聖母」や「天上聖母」(8)という言葉を使って表している



台北市新生路にある媽祖廟、「青龍天上聖母宮」の中の扁額。「聖母恩沢」と書かれている。



同じ建物内の媽祖像前の机。「天上聖母」という文字が見える。

この像がキリスト教会の敷地内に立っていないならば、この称号と像を見た時、恐らく台湾の多くの人が、「媽祖」を連想するのではないだろうか。何故なら、台湾における「聖母」という称号も、「天后」と同じく、「媽祖」を示す言葉として使われるのが通例だからである。左の写真をご覧いただきたい。



台南市中華聖母主教座堂の聖母子像①

るが、この像を見れば、恐らく「聖母マリア(聖母子像)」であることは理解できるかもしれない。しかし、同じ「中華聖母」という称号を持った聖母子像が、左の写真の台南市にある聖母子像であり、それはまた、違った表情を持っている。

が、先に挙げたように、「聖母」はキリスト教会でも「マリア」を表すためによく使われる言葉であり、「天上母親」という表現もされていた。このような表現上の「類似」や「共通性」が、大変誤解を招きやすいことは容易に理解できよう。

三、「天后聖母」と「聖母マリア」

ここで、冒頭の「天后聖母」の碑に話を戻す。すでにお気づきのことと思われるが、冒頭の石碑を含む全体の写真が左である。



台湾嘉義市内にあるベネディクト会（本篤会）総院敷地内のマリア像。最初の写真の全体像であるが、「聖瑪利亞（マリア）」と並んで「天后聖母」という碑が掲げられている。

これを見ると、聖マリア像に「天后聖母」という称号が付されていることが分かる。上述のように、「天后聖母」という称号は、台湾では「媽祖」に付されるのが一般的であり、恐らく台湾の人々にとっては、「天后聖母」イコール「媽祖」であろうことは既に述べた。私自身も、この碑と像を見た時、違和感を持たざるを得なかった。これは2007年3月に撮影したものであるが、当時これ以上の問題意識を持たなかったため、違和感のみが残っていたのであるが、その後、この

ような「天后聖母」と紹介された「聖マリア」像が在るのか調べたところ、管見の限りでは見いだせなかった。そこで、翌（2008）年、もう一度かの地を訪れ、この教会の責任者（神父）に真相を伺おうとしたが、残念ながら体調を崩されて入院中とのことであった。この教会は、台湾ベネディクト会（カトリックの修道会）の総本部であるので、台湾のベネディクト会が、このような呼称を使っているのかと考え、別のベネディクト会の教会（台北県泰山郷「尚義院」）も訪問したが、そこにはマリア像がなかった。現時点では、これ以上この「聖マリア像」と「天后聖母」の関係については不明である。

ただ、このような用例があることを、現地調査の折に訪れた台湾の他の教会関係者に尋ねたところ、台北市の主教座聖堂である聖母無原罪教会では「聖母マリア」と天后聖母は全く違うものです。（完全不一樣）と強く否定された。それ以上のコメントを引き出すことはできなかったが、明らかに不快感を催した様子であった。恐らく、敬虔な信者であれば（特に台湾では）、このような「習合」を連想させる称号は容認できないのかもしれない。しかし、同様に「全く違うものである」という見解を持ちながらも、台湾雲林県四湖郷にある遣使会教会の蘇喜徳神父（インドネシアの方）の話は、大変興味深かった。蘇神父の話のあらまはは次の通りである。

私は台湾に来て9年になりますが、知り合った中国（台湾）人にマリア像の写真を見せたところ、その友人は初めて見たマリア像を「媽祖だ！」と思っただけです。後で、これがキリスト教の聖マリア像であると分かったらいいのですが、最初見た時は区別できなかったそうですから、この（ベネディクト会にある「天后聖母」という）言葉の使い方は、もしかしたら「類似性」や「連想」を通してマリア像に親しみを覚えてもらおうとしているのかもしれない。

私はこの話を伺って、キリスト教が広まっている過程を目の当たりにしているのかもしれない、という感慨を持った。それは、時代は飛躍するかもしれないが、キリスト教がユダヤ地方から地中海を経てローマ、そしてヨーロッパに広まっていく過程について霜田美樹雄氏が次のように述べているからである。

ある宗教が広まること、信仰人が増加することはその宗教が教義、礼典において時代的地域的妥当性をもつことであるが、それは他面において異なる地域、時代、民族の諸性向に可能な限り習合（syncretism）できる融通性、弾

力性をもつことである。別言すれば、その宗教は教義、礼典において、まず土俗のそれに何らかの形で習合することができなければならない(9)。

この言葉が本論で扱う現在の台湾におけるキリスト教と媽祖信仰に、そのまま妥当できるかは、確言できない。それは、キリスト教は歴史上、「力」によって征服し、当地の住民を強制的に改宗させたという事実もあるからである。しかし、そのような事実があるにしても、私はキリスト教の中にある様々な要素が、土着の信仰由来であり、それらをキリスト教が吸収または類似する要素と習合させながら広まったと考えている(10)。このような立場を取るならば、この「聖マリア像」に「天后聖母」という称号を付す意図も理解できなくはない。無論、このような「習合」が後々問題を生じたことは、東アジアのキリスト教を見ても、中国明朝末期(16世紀)に中国で布教したイエズス会士の一連の活動から明白である(11)。それでも、「何か」を伝えようとする場合、特に「異文化・異言語」が横たわっている場合には、「類似性」を持つものによって理解や受容をしやすい(促す)という「翻訳」(12)が行われることは、我々の日常にもよくあることであろう。そのような例が先鋭的な形で表れたものが本論での「天后聖母」という称号なのではあるまいか。

繰り返しになるが、先に「聖母マリア」を「中華聖母」と表現している台南の聖母子像の例(写真①)を見たが、この「中華聖母」という「翻訳」そのものが、「媽祖」を連想させる表現方法であることは認識できていたのではないだろうか。この像本体だけを見た時、これをキリスト教の「聖母子(マリアとイエス)像」とどれだけの人が認識できるだろうか。恐らく台湾の人であれば、「媽祖」もしくは安産・子授けの神である「註生娘娘」を連想するのではないだろうか。それは無理のないことであって、責められるようなことではない。何故なら「中華聖母」という称号やその像の姿が、台湾の地域性や文化性に沿い、そして台湾の代表的な信仰である媽祖信仰をモデルにしていると考えられるからである(13)。

四、小結

現在の所、真相は不明であり、憶測の域を出てはいない。しかし、これまで述べてきた文脈から考えても、このベネディクト会の教会にある聖マリア像の称号が投げかけている問題は、示唆に富む問題であると考えている。無論、このマリ

ア像に「天后聖母」という称号が付されている事柄をとらえて「当地の宗教意識が明確に反映されている」と考えるのは臆断にすぎるのかもしれない。しかし、このような事柄を手がかりとして、東アジアの人々が持つ「宗教意識」を考えようとする上では、格好の材料となるのではないだろうか。このテーマに関しては今後も調査を続けていきたい。

(注及び参考文献)

- (1) 前稿に引き続き、参考資料として『教友問答手冊 天主教的祖先崇敬』(輔神研究小組編著、光啓出版社、1995年)の現代語訳を論末に付す。
- (2) 本テーマに関連する現地調査では、台湾師範大学国際漢学研究所助理教授である藤井倫明氏に案内いただいた。特に記して謝意を表したい。
- (3) 本テーマに関する現地調査は、2007年3月と2008年3月に行なったが、個人的に調査を行った2005年3月の写真も今回使用している。
- (4) 『札記』曲礼下編には「天子之妃曰后」とある。また「天后」は「天子」その人や天子の母などを指す場合もある。歴史上では、唐の則天武后を天后と称した。
- (5) 媽祖について、「960〜988年。北宋初に福建莆田に起こった信仰の開祖。名を林默という。実在の人物ではあるが、異説が多い。…父と兄の海難を予言してから巫としての能力を示し始め、30歳にならずして死んだ。その後、しばしば航海の安全、海難の救護などに靈験を顕わし、郷土湄州の処女神として祀られるに至った。1123年(宣和5)に宋の高麗冊封使の海難に靈験を顕したことから、順濟の廟額を朝廷から受けて国家的祭祀系列への編入が試みられ、1156年(紹興26)には靈惠夫人の号を賜わり、1190年(紹熙1)には靈惠妃の称を与えられ、称号の加与は13回にのぼった。…元になるとその1281年(至元18)、護国明著天妃と天妃の称を賜わり、清の1684年(康熙23)には護国庇民妙靈昭応弘仁普濟天后と天后号にのぼった。…民間では天后娘娘とも天上聖母とも言いならわされて、親しまれるに至った。」とある。(『道教辞典』平川出版社、2003年、5604頁。「…」は筆者による中略を示す。)

- (6) 「天后宮とは、天后聖母、すなわち媽祖を祀る廟。媽祖は、元には天妃、清には天后と封号された。天妃宮（廟）とか天后宮（廟）などと称される宮廟は、いずれも媽祖を祀る廟である。」（『道教辞典』平川出版社、2003年、424頁）
- (7) 例えば、台湾のキリスト教信者向けに発行されている『天主教信仰問答』（台湾地区手教団教義委員会編著、2005年）の中では、「聖母瑪利亞」として表現されている。また、ここに挙げた称号を使用している書として、『耶穌の母親』（耶穌会士張春申神父著、光啓出版社、1995年）、『耶穌の母親瑪利亞』（段特・隆傑内克、大衛・葛斯塔森著、張令憲訳、啓示出版、2004年）、『救主耶穌の母親—聖母論』（張春申著、光啓文化事業出版、2002年）、『中華聖母敬禮史話』（宋稚青著、聞道出版社、2006年）、『你的天上母親』（蓋蘭著、沈汝孝訳、光啓出版社、1960年。この書の中では「中国之后」という称号も使われている。67頁を参照）等がある。この他、台湾の各教会が「教堂」の名として使用しているものは「天主之母堂（台北市、台南市、嘉義県等）」「天上母后堂（雲林県）」等が主に挙げられる。
- (8) これは台北市新生路にある、媽祖を祀る青龍天上聖母宮の写真であるが、「媽祖」を「天上聖母」と表現している。天后宮や媽祖廟には多くの場合「天上聖母」と書かれた提灯が下げられているため、「天上聖母」であることは確言できる。これらについては、『華夏諸神 媽祖卷』（中国民間信仰叢書45、李露露著、台北雲竜出版、1999年）に、媽祖が一地方における海神から、東アジア地域にまで広がる信仰を持つ女神になった過程が詳細にまとめられている。またこの書の中では、媽祖が「天上聖母」として祀られている写真を紹介し（89頁）、かつ媽祖の事跡を描いた『天后聖母事跡図誌』を網羅的に紹介している。この他、台湾における媽祖信仰については『媽祖的故事』（黄晨淳編著、台湾好讀出版、2005年）に台湾各地の媽祖廟や天后宮がカラー写真付きで紹介されており、非常に有益である。
- (9) 霜田美樹雄著『新装版 キリスト教は如何にしてローマに広まったか』（早稲田大学出版部、1997年、序文）。このような「習合」の例として、媽祖の日本における伝播について興味深い指摘を天理大学の藤田明良氏がされている。藤田氏は、媽祖と日本の船玉神信仰を扱った報告の中で、「中国船の海外進出に伴って媽祖信仰は海域東アジアに拡がり、日本列島にも伝わった。」（53頁）とされ、「日本の媽祖信仰は地元の船乗りたちにも受容されていく。」（同）とされている。更に、この日本各地に拡がった媽祖信仰について、「国学の影響が強まるにしたがい、媽祖系の図像や祭神も次第に記紀系の神に置き換えられていった」（55頁）とされているが、その一方で、「しかし、磯浜の弟橘姫神社を、地元の人は今でも「天妃さん」と呼び、祭りを続けている。」（『東アジア海域交流史 現地調査研究』地域・環境・心性）第2号、平成17年度〜21年度 文部科学省特定領域研究 東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生 現地調査部門事務局、2007年、56頁）と指摘されている。これは、媽祖と弟橘姫を截然と区別排除するのではない、一種の習合の形であるが、日本で現在も息づいていることが確認できる。この他、媽祖とキリスト教の「マリア（聖母ではない）」の習合については、カリフォルニア大学リバーサイド校のルシル・チア氏のお話によると、「フィリピン諸島における中国演劇の中で、アンティポロの聖母（平和と航海の聖母）が、福建人の女神である媽祖と早くから同一視されていた」とのことである。詳しくは、2009年度『中国社会と文化』（東京大学 中国社会文化学会）に発表されることである。（鹿児島大学 高津孝氏のご教示による。）
- (10) これは従来指摘されていることであるが、先の霜田氏も前掲書の中で、処女懐胎（ヒンズー教・アグニ神、仏教・仏陀）、馬小屋での出生（ヒンズー教・アグニ神）、日曜日の安息日（ミトラス神信仰）、クリスマス（復活の概念・イシスとオシリス祭祀、ミトラス神信仰）、女神崇拜（地中海・キュベレイ神信仰）などについて、それらがキリスト教の中に取り込まれていったことを指摘されている。同書第9章及び12章を参照。また、同様のテーマについては『黒い聖母と悪魔の謎』（講談社現代新書1411、馬杉宗夫著、1998年）が簡便である。
- (11) その最たる例が所謂「典札問題」であるが、それは例えば儒教経書に言う「上帝」とキリスト教における「GOD（天主）」の同一視や、祖先祭祀に関わる問題である。その点についてはすでに筆者も触れたことがある（『台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察—祖先祭祀をめぐる問題—』（『北九州工業高等専門学校研究報告』第41号、2007年）が、『中国とキリスト教』（矢沢利彦著、近藤出版社、1972年）が

詳しい。

- (12) 例えば、「神」と「GOD」の「翻訳」に横たわる問題については、柳父章氏『ゴッド』は神か上帝か(岩波現代文庫、学術56、岩波書店、2001年)が参考になる。また、論末に付してある参考資料の「一九節」では、天国」と「極楽」との「類似性」に関する言及があるので、参照されたい。

- (13) 画像の問題については、先述の『中華聖母敬禮史話』(宋稚青著、聞道出版社、2006年)が参考になる。宋氏は「台湾各地の教会に掛けられている「聖母子」を描いた絵」について、「それらの絵の模範を作成した画家が、作成に当たって、北京で購入した清の「慈禧皇太后(西太后)」を描いた絵を模倣して作成した」ことを指摘されている(同書第五章二節)。この他、台南の中華聖母像に限らず、「中華風」にアレンジされた画像は枚挙にいとまがない。これも恐らく「親しみやすさ、理解しやすさ」を重視した結果であろう。

(参考資料) 前稿に引き続き、『教友問答手冊 天主教的祖先崇敬』(輔神研究小組編著、光啓出版社、1995年)を訳出するが、紙面の都合上、一三節から二〇節のみを掲載した。(訳文、原文とも注は省略した)

〔現代語訳〕

一三、信者が(清明節等に)お墓参りする時、「掛け紙」を用いることはできませんか。

【答】民間習俗に照らして考えれば、お墓参りの後、お墓の上に「黄色の古紙」や「五色の紙」を置き、それを小石で押さえて墓参りをした目印とし、後継ぎがいることを表わす目印として、人に壊されるのを避けようとする場合には、採り入れて

も構いません。

但し、その中に「蓋瓦(屋根としての瓦)」という意味が含まれることに對しては、信仰に従って解釈しなければなりません。つまり、死者は陰間(死後の世界)においては住宅を必要としないのですから、当然家の屋根に当る「蓋瓦」も必要としません。誤解を避けるために、(祭祀の時に使う)「五色の紙」や「黄色の古紙」に代えて「復活の紙」、つまり例えば台中互愛伝播服務センターが製造印刷しているイエスの復活の絵や聖なる言葉が書かれている紙で代用させるのがよいでしょう。それは死者がすでにイエスと共に復活、昇天し、共に三位一体の神と永遠の幸福の内にあることを象徴するものだからです。

(以下、原文を節ごとに挿入する。原本(台湾)は繁体字であるが、できるところ範囲内で常用漢字になおしてある。但し日本の常用漢字にない場合は繁体字のままとした。)

《原文》一三、教友掃墓時可以用掛紙嗎?

(答) 按照民間習俗、掃墓後在墓頂放上「黄色古紙」或「五色紙」、压上小土石、作為掃墓的標記、表示有後嗣承認的標記、以免被人毀損、因此是可以採用的。但對於含有「蓋瓦」之意、应当從信仰解釋、亡者已不需要在陰間擁有住宅、當然就不需要為其蓋瓦。為避免產生誤會、可將「五色紙」或「黄色古紙」改用「復活紙」、即如台中互愛傳播服務中心所印製的耶穌復活及聖言紙代替。象徵亡者已同耶穌一起復活・昇天、一起參與天主聖三共融的永福。

一四、祖先の墳墓に関する風水の説に依れば、子孫の幸福に影響があるようですが、カトリックではこのような習俗に對してどの様な見方をしますか。

【答】台湾の民間で行なわれている「日を選ぶ」と「陰陽風水」はかねてから盛んですが、一般的な言い方をすれば、「日を選ぶ」のはある特別な行事を行なう際に、日柄や数の良い日を選ぶ占いの方法であり、風水は陽宅(生きている人の家)或いは陰宅(墳墓)の場所を決めるのに、良い場所を占う方法とされています。この両者は時間と空間に関わるものですが、その根拠となる陰陽五行説の構築した時間や空間に関する秩序は、「現実」の時間や空間ではありません。

所謂「良い風水」とは、建物(陽宅や陰宅)を立てる場所が占める空間、及び建物の構造(レイアウト)や周囲との関係が、時間・空間的に完全に調和がとれていることであり、時にはその責任者や工事時間の調和を求められる場合さえあります。それは、靈魂(鬼霊)の居場所である墳墓の風水が妥当であるかどうか、子

孫に幸福をもたらすか禍をもたらすかを決定する重要な原因だと見なされているからです。

占いは、陰陽五行説で唱えられる宇宙観が、民間信仰の中に実際に現れたものであつて、陰陽五行説は中国における宇宙観の中の宇宙に対する解釈の大系です。その基礎は一組の陰陽が自分なりに系統を作り上げるといふ「仮設」であつて、それが広大な演繹能力を有していたが故に幾千年の記号と言語の推断と演繹を経て、民間生活に深く浸透し、牢固として抜きがたい普遍的な観念となつています。

カトリックでは父なる神が天地を創造し、全てが正しくあるのですから、人間が引き起こす罪惡によつてのみ、この世界が混乱に陥ると信じられています。子孫が幸福になるかどうかは先祖の関与することではなく、まして先祖の墳墓の風水によつて左右されるものでもありません。信者としては、他人の風水に対する見方は尊重しても構いませんが、信者自身が風水の考え方を受け入れる必要は全くありません。但し、現在の「生態（プロセス）」神学の考え方は、私達人間は死者と宇宙全体と、密接で不可分な関係にあると見なされるようになっていきます。

《原文》一四、掘説祖墳の風水會影響子孫の福祿、天主教怎麼看這個習俗？

〔答〕台湾民間扶日与陰陽風水素來盛行、一般而言、扶日は選択特定行事の良辰吉日の術数、風水は選択陽宅或陰宅（墳墓）吉利空間の術数。兩者所指涉の時間与空間、指的是由陰陽五行學說所擬構の時空秩序系統、而非「實際」的時間・空間。所謂の「好風水」是指宮建物（陽宅或墳墓）所處的空間、及宮建物的格局、与周圍的環境之關係、在時空系統中的完全和諧、有時還要加上主事者及宮建時間的和諧。鬼靈所居の墳墓、其風水是否妥当、被認為是降福或作祟子孫的重要原因。術数是陰陽五行的宇宙觀在民間信仰中的實踐、而陰陽五行説是中国宇宙觀中的宇宙解釋系統。其基礎是一組自成系統的「仮設」、而具有広大的演繹能力、經過幾千年的符号和語言的推演、深入民間生活、成為牢不可拔の普遍觀念。天主教相信天主教創造天地、樣樣都好、只因人的罪惡而使世界敗壞。子孫の福祿並不操之在祖先的手中、更不操縱在素墳の風水上。教友可以尊重別人對於風水的看法、但自己不必接受「風水」的道理。但是、在今日的生態神學觀念中、我們肯定人与亡者和整個宇宙都有密接不可分的關係。

一五、カトリック信者も他の宗教の葬儀や命日の法事などに参加できますか。もしできるのなら、そのような場合に（他の宗教の）読経に従つたり礼拝に参加

しても良いのでしょうか。

【答】カトリックの葬儀に他の宗教の信者がいつも参加しているように、私達信者も他の宗教の葬儀に参加する必要がある場合には、その儀礼形式にとられることなく、キリストの愛の精神に基づいて死者のために祈りを捧げ、その親戚を慰めるべきでしょう。

一般的に言えば、死者の近親（直系の親屬や、甥、姪など）以外は、公祭（弔祭）及び葬列に参加する程度にすぎません。弔祭（告別式）では、死者の魂帛（靈位、位牌）や棺、遺影に向かつて練香を上げたり花を手向けたり、または最敬礼などの行動で敬意を表わすのは理に適つたことですし、その時に「主が彼（死者）に永遠の安息を賜われん事を望みます」と黙禱したり、前述したような行動をすることは、私達の教会の典礼でも採用しています。

教会の信仰から考えれば、人は死ぬことによつてその存在形態を変え、聖なる神の内にあつて、直接神とまみえることとなります。だから死者の靈魂が位牌や棺の上に取り憑くというのは、（それらに対する）懼れは生じさせるかもしれませんが、信じるべきものではなく、尊重する、という意思表示をしていけばよいでしょう。葬儀において遵守すべき各種の忌諱についても、尊重するという意思に基づいて（自身の信仰と）融合させ、妄りに批判を加えてはいけません。もし、教会における信仰と明らかに衝突する事例に直面したら、その儀礼には参加せず、極力丁寧なその理由を説明する必要があります。

《原文》一五、天主教教友也可以参加其他宗教的喪禮・忌日及祭祀嗎？如果可以的話、在那種場合也可以隨著誦經或参与祭拜嗎？

〔答〕天主教喪禮常有其他宗教的信友参加、同様、我們教友也有必要参加其他宗教喪禮、不要拘泥於其禮儀形式、本著基督徒的愛心為亡者祈禱並安慰其親屬。一般而言、除了亡者近親（直系親屬・姪甥輩）外、僅是参与公祭（弔祭）及送葬行列、在弔祭中向亡者魂帛（靈位）・靈柩或遺像、以上香・獻花或鞠躬等行動致敬是合適的、同時可默禱「望主賜他永遠的安息」、前述挙動我們教会禮儀亦採用。按教會的信仰、人因死亡而改變其存在方式、直接在聖神内面对天父。因而亡者靈魂附在靈位或者棺木上、令人生懼、是不可相信的、僅表示尊重即可。至於喪禮中拘守の各種忌諱、也基於尊重加以配合、不必妄加批判。如發現与教会信仰明顯衝突、則不参与並儘量委婉解說。

一六、私はカトリック信者ですが、私の先生や先生の家族は皆、仏教や道教、もしくは民間宗教の信者です。もし私が位牌(魂帛)や棺、仏壇(法壇)の前で(功德を為す時や、法事の時)合掌して参拝したり、食事や生贄を供物として捧げたり、紙幣や紙で作った家、紙庫などを焼いて死者のために祈りを捧げたりすることは許されますか。

【答】家族の一員であって、まだ洗礼は受けていませんでしたが、心に善意を懐いたまま世を去ってしまった人のために神の救いと恵みを祈るのは良い行いです。

死者は、死んでしまったことでその存在形態を変えますが、全ては父なる神の慈しみ深い計らいの内にあると信じていけば、必ずしも死者を恐れる必要はありません。つまり、遺体(棺)に対して敬意を払ってあげれば、恐れを懐いたり不安になつたりすることは無いのです。もし「法事」(功德を行なう行事)や、「安魂超渡」の儀式を挙行したりする時には、傍らで供物としての食事や香台を設置する手助けをすべきでしょう。ただ、先生や親族に丁寧な説明をしてから、傍らで死者のために祈ることは構いません。供物としての食事や香台は単に死者に対するとおしや尊敬を表わすためだけのものだから、必ずしも忌諱することはありません。悲しみが深い葬儀では、自然と死者に対する懐かしさや悼む思いが自然に溢れてくると思いますが、だからといって必ずしも故意に慟哭する必要もありません。

死者のために紙幣や紙で作った家、紙庫などを焼く行為について、これらは民間の信仰観念から出てきたものですから、信者は孝行の思いに基づいて傍で手助けするのは構いません。このやり方でなくとも、亡くなった親族や友人のために祈ることとは出来ずし、そうでなければキリスト教の信仰と合わなくなってしまう。但し、もし家族の多くがあくまでも彼らの風俗或いは宗教儀式に合わせるよう要求するのでしたら、個人として情況に応じて、信仰の良心に従った決定を下すことができます。

《原文》一六、我是天主教教友、我的先生及他的家族皆是仏道或民間宗教的信徒。如果我在牌位(魂帛)、棺柩或法壇前(做功德・法事時)合掌参拜・供奉飯食牲札、或燃燒銀紙・紙厝及金庫為亡者祈禱可以嗎?

【答】做為家庭的成員、向未受洗而心存善意去世的亡者祈求保佑、是一項善舉。亡者因死亡而改變其存在方式、深信一切皆在天父仁慈的計畫中而不必恐懼。對遺體(棺木)尊敬而不必恐懼不安。如舉行「做法事」(做功德)・安魂超渡儀式、可從旁協助擺設飯食香燭。但向先生及親屬委婉說明而在旁合掌為亡者祈禱即可、飯食香燭只

是對亡者表示愛心與尊敬、不必避諱。在哀傷的喪禮中、自然表達對亡者的懷念與哀思、因而不必故意号哭。至於為亡者燒銀紙・紙厝・金庫等舉動、是由民間的信仰觀念而來、教友基於孝思、可從旁協助即可、不必以此方式向亡故親友祈禱、否則基督信仰不合。但是如果多數家人堅持要求配合他們的風俗或宗教儀式、則個人可按情況做合乎信仰良心的決定。

一七、私が宗家の跡継ぎであり、先祖も両親も皆仏教・道教、或いは民間宗教の信者です。葬儀の方法(典礼)について、私の兄弟や親戚が皆和尚か道士(烏頭司公)に法事を執り行つてもらうよう頼もう、と言う場合、私はどの様にするべきでしょうか。

【答】家族で自分より上の人(父母、祖父母、兄、姉、伯父、伯母など)が亡くなった場合、親族達は親の死別に直面して、いつも悲しみ悼む空気に包まれます。私達はキリストへの信仰に基づいて、父なる神が自ら安息と慰めを下されると信じましよう。生と死の二つの異なる状態にあつても、神の慈愛と近しい人への感謝と懐かしむ気持ちによつて、親族と死者との関係は依然として固く結ばれています。たとえ死者が神を知らないとしても、他の(その人自身の)宗教において良心と誠意に従つて生活し、家庭に奉仕していたのであれば、その死者もまた永遠の幸福に預かることが出来ると私達は深く信じています。

教会の葬禮の儀式は、いつも私達に勇敢に立ち向かうことや、永遠の生命への希望を持つことに力を与えてくれます。だから自分が家の相続人、または長男であったならば、よりキリストへの信仰に基づいた儀禮に沿つて、死者への祈りを捧げる責任が出て来ますし、家族に向かって父なる神に早く永遠の生命を賜うことを求めるよう、説明をしなくてはなりません。

但し、あなたの孝行の心がまだ家族の賛同を得ていないのならば、愛の心に基づいて彼らの作法を尊重し、他の宗教を軽んじるのではなく、心を尽くして皆と一緒に準備を整えるようにしましょう。そして新鮮な花や果物を、供物として捧げる食事や多くの紙幣の代わりに使うことに励み、儀式を荘厳で悲しみの心を尽くしたものにしよう務めるのです。同時に喪に服す間や葬禮の時に、教会の同じ信仰にある兄弟姉妹に、神父と共に死者のために祈りに来るよう要請して、教会として関心があることを示しましょう。

キリスト教の信仰にある祭祀と違うもの、例えば天神地祇に祈るような法事等に

ついで、事前に丁寧な説明を行なつてから、黙禱をすることでのその法事に参加する代わりをするといふでしょう。家族の者の多くが、あなたが長男で家を継ぐ身であるからという理由で、他宗教の儀式への参加を要求する時は、個人として情況に依つて、信仰の良心に従つた決定を下すことができます。

《原文》一七、我是全家的繼承人、祖先及双親都是仏道或民間宗教的信徒。關於喪禮的儀式、我的兄弟及親戚都主張請和尚或道士（烏頭司公）舉行法事、我該怎麼辦？（答）家中尊親屬逝世、親屬面對至親死別、常被哀傷及痛苦所籠罩。我們基於基督的信仰、而相信天父要親自安慰幫助。雖然處於死與生兩個不同狀態、但是經由天主的慈愛與近人的感念、親屬與亡者的關係依然穩固。即使亡者不認識天主、而在其他宗教中按良心誠意地生活、奉獻於家庭、我們深信亡者也會贏得預許的永福。教會喪禮常能幫助我們勇敢地面對並看到永生的希望。因而身為繼承人或長子、更有責任以基督信仰的禮儀為亡者祈禱、並向家人解說、求天父早日賜予永生。但是、有時這份孝心未必得到家庭其他成員的贊同、那就基於愛心尊重他們的作法、不鄙視其他宗教、並盡心偕同準備、鼓勵使用鮮花素果代替食物的供奉與過多的紙錢、務使儀式肅穆悲哀。同時在居喪期或喪禮時、邀請教會的兄弟姊妹與神父同來為亡者祈禱、表達教會團體的關心。至於有違基督信仰的祭拜、如祈求神祇的法事、則事先委婉說明後、以默禱代替參加。當家中多數親友要求以長子身分配合其外教儀式時、個人亦可按情況做合乎信仰良心的決定。

一八、最近では、代々の先祖の墳墓を一カ所に集めようと思つてゐる人がいます。しかし、墓碑を作る人はこう言います、「亡者の靈魂は墓碑に宿るのだから、靈魂を墓碑から除くことは出来ない（から一カ所に集めることは出来ない）」と。私達はどうすれば良いのでしょうか。

【答】先祖の墳墓を家族の墓地か、或いは一カ所に合葬したり、もしくは一つの納骨堂に入れることは、家族が先祖を追慕したり、その恩義を感謝したりするのに便利ですし、家族が行き来するのを促進して親子のつながりを強めることが出来ます。所謂「人生の終わりである死、特に父母の死に対する儀式を慎重に大切に、何代も前の先祖を追慕してそれらに対する祭祀を丁寧にすれば、一般の人民の行爲も、篤実な方向へ帰着する」（『論語』学而）ことですから、賞賛し押し広めるに値します。

一般的な民間宗教では、靈魂は墓碑に宿るといふことや、様々な忌諱（忌み事）

が信じられています。これは事実上キリスト教の信仰と相容れません。但し、墓碑を作る人を安心させるためや、親戚や兄弟の見方を尊重するためにも、彼らのやり方に従つて和尚もしくは道士を招いて除霊を行なつてもらうことについては、何も差し支えはないでしょう。原則として、先祖は家族全員で祀るものですから、多数側の意見を尊重し、採り入れるようにしましょう。

《原文》一八、最近打算把歷代祖先的墳墓集中在一個地方、可是做墓碑的人說、「亡者の靈魂附在墓碑上、非把靈魂自墓碑上除去不可。」我應該怎麼做才好呢？

（答）將先人墳墓合葬在家庭墓地、或同一地方、或納入同一靈骨塔、便利家族紀念先人、追念其德沢、並可促進家族成員的往來、加強親情的連繫、所謂「慎終追遠、民德歸厚矣！」值得嘉許及推廣。一般民間宗教相信靈魂附在墓碑及種種忌諱、事實上與基督信仰不合。但為了讓做墓碑的人安心、或尊重其他親戚、兄弟的看法、隨從他們的方式任其延請和尚或道士來除靈亦無不可。原則上、祖先是屬於家族的、自當尊重採納多數人的意見。

一九、私本人はカトリックの信者ですが、私の先祖や父母は皆、他の宗教（仏教）の信者です。父母が死後、先祖と同じ極楽に行くことが出来ないのではないかと心配し、洗礼を受けることを望まなくなつて避けるためには、私ほどの様にすべきでしょうか。

【答】常々カトリックの信者達は彼らの母親にこう勧めています、「お母さん、あなたも洗礼を受けてはどうですか」と。このような時、その母はこう拒否するでしょう、「あなたの父親はすでにあの極楽にいます。私もお父さんと一緒に極楽に行きたい」と。この母親の愛情は真に尊ぶべきものです。

しかし、カトリックの教義から見れば、この母親が思い悩んでいる事柄は、意味がありません。何故なら、聖パウロがローマ人に与えた書簡に、次のようにあるからです。「真の神であり、救い主であるキリストを全く知らない人でも、自分自身と良心に忠実で有りさえすれば、（キリスト教徒と同じように）神の恩愛を受けることが出来るのである」と。

これに依れば、あらゆる死者（仏教徒、道教徒、或るいはイスラム教徒を問わず）は、皆、神との交わりの中で、近しい人たちのつながりを得られるのです。所謂「天国」と「極楽世界」とは、実際、似たようなものなのです。亡くなった人たちは皆、主である神の永遠の愛の中に包まれて居るのですから。

総括して言うと、カトリックの信者がカトリックの祈りや典礼に従って行なうことは、先祖を敬い尊ぶだけでなく、先祖にとっても大変意義のあることなのです。子供達は、父母に対する孝行の思いを示し、両親が年を取って直面する様々な情況を手助けするためにも、信者はその父母に洗礼を受けることを勧めるとよいでしょう。

《原文》一九、我本人は天主教的教友、可是我的祖先以及父母親都是其他宗教（仏教）の信徒、為了避免父母担心死後不能与祖先同在一個極樂世而不願領洗、我該如何作呢？

（答）常常有天主教的教友勸他們的母親說、「母親、您也受洗罷！」這時、那這位母親拒絕說、「你的父親已經在那個極樂世界、我也要和他在一起。」這位母親的愛情真是可佩。但是以天主教的教義來看、這位母親所煩惱的是沒有意義的。在聖保祿給羅馬人的書信中提過、對真神・教主耶穌基督完全不認識的人、只要對自己 and 良心忠實、同樣可獲得天主的愛。因此所有的亡者（無論是信徒・道教信友或回教徒）、都可以在与主相契中与近親取得連繫。所謂天国与極樂世界、其美是同樣的境界。所有死去的人、皆可居住在天主永存的愛中。總而言之、天主教的教友藉著天主教的祈禱及禮儀、不只是可以崇敬祖先、同時對祖先也是一件很有意義的事。子女為表達對父母的孝思、幫助他們面對老年的各種情況、教友可以鼓勵父母接受洗禮。

二〇、我が家には仏教を信じる人がいて、死者の誕生日や命日、また中元普渡節には和尚さんに来てもらって法事を頼もうとするのですが、私はこれを拒絶するべきでしょうか。

【答】すでに亡くなった、親しい人に対する孝行の思いを示す時には、個人がそれぞれの信仰する宗教の方式に従って示せば良いでしょうし、それは一人一人の持っている権利でもあります。もし、家族の中で仏教を信仰して、和尚さんに頼んで法事をしてもらおうという人がいるのなら、私達はその考えを尊重しなければなりません。もし家族の人がカトリックを否定しないのであれば、私達は積極的に神父や信者仲間、家に来て死者のために祈りを捧げたり、供養したりしてもらうようにすると良いでしょう。

また、家族の大多数の人が民間宗教を信仰して、カトリックを否定し排除しようとする時には、過大な衝突や、あなた自身が不孝者であるという家族の誤解と悪い噂が立つのを避けるために、このような時は（仕方なく）その法事に参加して、心

の中で黙禱を捧げると良いでしょう。

このような状況下で他宗教の儀式に参加することは、あなたの「信仰の裏切り」を示すのではなく、あなたの死者や家族に対する深い愛と尊重を示すことになるのですから。

《原文》二〇、我家有人信仏、在亡者的生辰忌日・中元普渡節、会請和尚来作法事、我應該拒絕嗎？

（答）對已亡親人表達孝思、而用個人宗教信仰的方式表達、這是每一個家人的權利。如果家人信仏、而請和尚來做法事、我們應當尊重。如果家人並不排斥天主教、我們可以積極的請神父和教友到家裡來為亡者祈禱・獻祭。當家人大多數信仰民間宗教、排斥天主教時、為了避免過大的衝突、或使家人誤會自己不孝、立下惡表、此時可以參與、並在心中默禱。在這種情形下參與外教禮儀、並不表示自己背教、而是表達自己對亡者和家人一份深遠的愛與尊重。

・本稿は、文部科学省科学研究費補助金「若手研究(B)」(研究課題番号19720011)

「東アジアの宗族におけるキリスト教思想の影響——儒教規範に基づく家族規範を中心に

——」による研究成果の一部である。

(二〇〇八年一〇月一〇日 受理)